自立を促す回復期リハビリテーションを展開

最新医療経営 Phase3

フェイズ・スリー

2009 August 抜刷版

8

医療法人社団アルペン会

アルペンリハビリテーション病院

たくさんの心が立ち上がり、
「幸せなこれから」に
向かって進めるよう、生きる力を
引き出し、つなげていきます。

〝生活が送れる〟ことを見据え 自立促す回復期リハを実践

医療法人社団アルペン会 アルペンリハビリテーション病院（富山県富山市）

一日も早い在宅復帰をめざし
集中的にリハビリを行う病院を新設。
併設する通所リハ施設とともに
ひとつの「リハビレッジ」という村を完成。
全室個室や最新のリハマシンなど
快適なアメニティー環境を整え、
自宅を連想させる狭い扉下での
移動訓練が可能なADL室も完備。
生活そのものをリハビリの場に変える
さまざまな工夫がここにはある。
75日間という限られた時間のなかで
自立と希望を取り戻すべく、
今日も患者を支え続けている。

リハビリは病棟部下でも行われ、リハビリスタッフ(PT、OT、ST)は9名にもなる。CWとケアワーカーなども参加し、1人の患者に対し多職種のチームアプローチを実践

アルペンリハビリテーション病院の外観は、平屋建てをイメージするつくり

取材・文／西野博

「わたしたちがめざす病院は、一病気を治す場所ではなく、〝生きる〟という原点に立ち戻って、新しい視点で人生をとらえ、より豊かに生きていただくための手伝いをさせていただくことです」と力強く語るのは、医療法人社団アルペン会アルペンリハビリテーション病院の室谷かも院長だ。

2008年6月、同院は富山市に程近い静豊な土地に新築移転し、長期療養病床から回復期リハ専門の病院に業態を転換、現来の病院のイメージを覆す施設設備と運営方針を打ち出した。平屋建ての通路をつなぐ外観、自然採光を取り入れた明るい院内、都会のカフェテラスのようなエントリームなど、快適なアメニティーを追求しつつ、スタッフは清潔感と機能性を視野に入れ、お互いを〝さんづけ〟で呼び合う、こういった院内風土を実現化した背景には、さまざまな医療機関を自分の眼で確認していくなかで触発された、室谷院長自身のこだわりがあった。

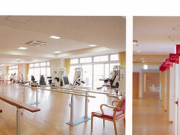
前身である室谷病院は、療養病院として地域住民からながく愛されてきた。しかし、ただ入院患者の症状が悪化すると、回復が難しく次第に患者者の家情が厳しくなっていくという悩みを抱えていた。そんなとき、一つの転機が訪れた。退院した患者が深刻な状況の「入院」さえ断られてよかったねと言われたことだ。当時、動務医だった室谷院長は愕然とした。今まで病気を治す技術は学んできたが、生活が送れるようになるまで回復するにはいったい何が必要なのだろう……と。

一念発起した室谷院長は、これまでの医療に対する想いを見つめ直すべく、オーストラリア高齢者には、自立する意欲と誇りが満ちあふれていた。サービスを提供する側も、過剰にお世話をせずに自立を尊重している。感銘を受けた室谷院長は、帰国後、回復期リハビリテーション病院（東京都渋谷区）で働く機会を得て、回復期リハを通した理想の医療提供体制を思い描いていった。

その結果生まれたのが、バリアフリー構造にこだわりすぎず、住み慣れた自宅の状況に近い敷低限の〝バリアフ〟をあえて設置するという逆転の発想。新築の院内では、ADL室に段差や狭い廊下を体感できるスペースをつくり、入浴は機械浴ではなく、一般家庭と同じ風呂を配置する。

人材育成を強化し学校のような病院をつくりたい

▲「患者さんの回復は私たちのエネルギーの源です」と語る笹谷ひかり院長



▲採光重かな機能訓練室では快適にリハビリに専念できる

病室には通り名や番地名がつけられ、病院らしからぬ空間をめざしている

←あえて設差をつくり、自宅に近い環境をつくっているADL室

←エントランスに入ると明るい中庭が見える総合受付がある

→改き装けが開放感を醸し出すアトリウムは安らげる空間のつくり

ハード面から患者自身の能力と意欲を引き出し、「できるようになったから、当たり前のようにしてほしい」への転換をめざした。また、冬に暖房を入れ地域性を考慮し、天候に左右されずに散歩を楽しめるよう、敷地を大きくした採光豊かな施設を設置。快適にハビリ生活を送れるよう工夫を凝らしている。

病院に併設する通所リハ施設では、海外から輸入した行ハビリマシンを導入したほか、料理や園芸などの趣味を楽しめる身体教室を定期的に開催（隔月、本一教室は単発）し、日々の生活を送っている。

さらに、施設全体を「村」と位置づけ、各所に広場やアトリウムを設置。病室だけでなく、患者自身がホッとしてくつろげる場所や家族と過ごす場所として、さらに同じ症状を抱える患者同士が触れ合える場所として、退院までの約75日間に患者の自立をサポートする最適な空間づくりを追求している。「一緒に生活する人同士が刺激あうことで、ポジティブな思考が生まれてくるのです」と笹谷院長は説明する。

病室を全室洗面所、トイレ付きの個室にするなど、プライバシーの保護とともに、在宅復帰のための生活リハビリの要素を多く盛り込んでいる。トイレに行く、顔を洗う、服を着るなどの多くのニーズのもとに総勢150人のスタッフがチームで支援。医師や看護師、リハビリスタッフなどが集まる定期カンファレンスでは、患者の症状や生活状況などをこと細かに確認しながら、チーム医療を通じて医療の質向上とともにリスク管理も徹底している。

医療とサービスの質担保のため、スタッフの教育体制も強化。入職時の新人研修のほか、3年目以上のベテランスタッフは、系列の介護サービスや他院、外部研修などで、積極的に参加、加えて、年2回、ヒューマンコミュニケーションの学習のために大学教授を招いているなど、スタッフ全員が常に知識を習得し、同じ想いを共有できる院内プログラムづくりに励んでいる。

就業面では、入職者研修を年度末に行い、スタッフが自己目標発表を評価し、責任に医療をせていく予定だ。このほか、連続2日間の休みを取れるリフレッシュ休暇など、スタッフのモチベーションを維持する手法も取り入れている。

ここにたどり着くまでは、過去に医療環境の整備に精通する経験豊かな、団塊の世代が後期高齢者に突入する2025年を見据え、さらなる改革に取り組もうとしている。「かつて同病棟勤務のとき、時代はドラスティックに変わります。そうであるのは、私たちが医療を通して、どう社会貢献できるかを、今から考えはじめなければならないのです」と語る目は、医療界を背負って立つ意気込みにあふれている。今も笹谷院長の手腕から目が離せない。

病院データ

医療法人社団アルペン会
アルペンリハビリテーション病院

富山市楠木300番地
電話　076-438-7770
http://www.alpen-reha.jp
病床数 50床
診療科目 リハビリテーション科
関連施設 医療法人社団アルペン会アルペン整台クリニック（在宅療養支援診療所、居宅介護支援事業所 訪問介護ステーション 訪問看護ステーション併設）／社会福祉法人アルペン会　アルペンハイツ（特別養護老人ホーム、短期入所生活介護、居宅介護支援事業所、地域包括支援センター　デイサービスセンター併設）、軽費老人ホーム　ケアハウスとやまくらんバーステーション併設）

【沿革】
1951年に開院した外科系診療所が原点。81年、外科、整形外科、内科を標榜するBB床の病院として発展したのち、98年に療養型病床群となる。その後、高齢者の社会状況変化を捉えてくるなかで、2008年6月、回復期リハ専門の病院として生まれ変わった。快適なアメニティー環境と自立をサポートしていく体制には定評がある。

病棟廊下には、一息つける休憩スペースを設置

↑通所リハ「あいの風」の「ぬくもりホール」。壁後は中央のテーブルでバイキング方式。利用者はできることを、難しいところをスタッフとともに工夫しながら行う

↑通所リハ「あいの風」にあるシャワー室。義足装着からの取り組む

←個室室では利用者ともに四季折々の草花の世話をし、そこに寝いた花々は病室に飾られている

→ADL室にあるトイレにはアクリル張所。相才タイプ、引くタイプ両方が体験できる